摺絵／鉄釉

Surie (Stencil Print)
Tetsu-yu (Iron Glaze)

“摺 & 鉄”映え！
ポップアート
in 江戸

ポスト織部の時代のその後
― 日用品生産への転換 ―

17世紀中頃以降になると御深井は、釉調が本来の濃い青灰色から薄い青灰色のものへ変化し、彫りや刻線文様がなくなり絵付けに摺絵が多用されるようになります。また白釉も陶器で中国や肥前の染付（磁器）を目指した焼物であることから、本歌（ほんか）と比べ文様の鮮明さや白さが劣るため、この頃にはその姿を消していきます。器種に関しても水注や徳利、花瓶、香炉、鬢盥（びんだらい）などの日用品が主体となり、施される釉薬も鉄釉が多数を占めるようになります。こうした生産様相の変化は美濃窯全体に及ぶもので、このような背景には江戸の人口増加に伴う日用品への需要拡大と「波佐見（はさみ）」などの肥前の諸窯が海外の輸出品から国内の庶民層向けの日用品の量産へ移行したことにあります。そのため、美濃では肥前とは異なる製品を作る必要があったと考えられます。

御深井釉水注（18世紀前期）

〖 摺絵による絵付け 〗

御深井釉鬢盥（17世紀後期～18世紀前期）

鉄釉花瓶（18世紀前期）

鉄釉香炉（17世紀中期～後期）

EVENT 関連イベント

1 講演会『織部から遠州へ ―茶の湯の美意識―』
日時：2024年**11**月**24**日（日）13：30 ～ 15：00
講師：清水実氏（三井記念美術館学芸部長）
会場：土岐市美濃焼伝統産業会館２階研修室　※事前申し込み不要・聴講無料

2 学芸員による展示解説
日時：2024年**12**月**7**日（土）／ 2025年**1**月**18**日（土）14：00 ～

※その他イベント詳細や最新情報については、当館ホームページでご確認ください。

〖 土岐市美濃陶磁歴史館企画展 出張展示会場 〗

土岐市美濃焼伝統産業会館 第1展示室
〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻1429-8
≪交通のご案内≫
[鉄　道] 名古屋駅からJR中央本線「土岐市駅」下車 タクシー約10分
[自動車] 東海環状自動車道「五斗蒔スマートIC」から約2分

ときめくときを きみとさもう
70th TOKI CITY
土岐市制70周年

土岐市美濃陶磁歴史館
TOKI CITY HISTORICAL MUSEUM OF MINO CERAMICS

土岐市美濃陶磁歴史館は、新博物館建設に伴い休館中です。
令和９年度まで土岐市美濃焼伝統産業会館で館外展示を行います。

[お問い合わせ]
〒509-5122 岐阜県土岐市土岐津町土岐口2121-1 土岐市文化プラザ3階
TEL.0572-55-1245　FAX.0572-55-1246
土岐市文化振興事業団ホームページ　http://www.toki-bunka.or.jp/history

TOKIHAKU PROJECT
トキハク プロジェクト
＼ 新しい博物館を作っています ／
トキハクプロジェクト
メンバー募集中！
ともに活動していただける方
“メンバー登録”はこちら

国際陶磁器フェスティバル美濃'24
INTERNATIONAL CERAMICS FESTIVAL MINO'24, JAPAN

寛永文化の開華 ― 美濃窯やきもの新潮流！

Post Oribe

ポスト織部の時代

New trends in Mino kilns, after the “Oribe Style”

“Ofuke” & “Haku-yu”

御深井と白釉

2024 **10.5** SAT → 2025 **1.26** SUN　**出張展示**

【会場】土岐市美濃焼伝統産業会館
第1展示室
〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻1429-8
【開館時間】午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）
【休 館 日】月曜日（祝日の場合は開館、火・水曜日は休館）
祝日の翌日（土曜日が祝日の場合、日曜日は開館、火曜日休館）
年末年始（12/29～1/3）
【入 館 料】無料
企画：公益財団法人 土岐市文化振興事業団

土岐市美濃陶磁歴史館
TOKI CITY HISTORICAL MUSEUM OF MINO CERAMICS

土岐市美濃陶磁歴史館は、新博物館開館に伴い令和6年3月31日をもって休館し、新館開館の令和９年度まで土岐市美濃焼伝統産業会館で館外展示を行います。
今回はその第一弾として「ポスト織部の時代」展を開催いたします。

安土桃山時代から江戸時代初頭、元屋敷窯を中心とする美濃窯では、畿内での茶の湯の流行を受け黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった美濃桃山茶陶が多数生産されていました。その後、慶長年間（1596-1615）の末年から元和年間（1615-1624）に入ると、織部には形状や大きさ、施釉法などに変化が現れ始めます。そして元和年間の末年から寛永年間（1624-1644）には、「御深井（おふけ）」や「白釉（はくゆう）」と呼ばれる、織部とは異なる新しいスタイルの焼物が生産されるようになります。
今回の展示では、織部以降に生産された焼物の時代を「ポスト織部の時代」と称し、その時代に生産された焼物の特徴と時代背景を紹介します。

写真：上ー黒織部茶碗（17世紀前期）　下段　左ー御深井釉茶碗（17世紀前期）　右ー白釉茶碗（17世紀前期）

ポスト織部の時代とは

慶長20年（1615年）、大坂夏の陣が終わり豊臣氏が滅亡すると、
徳川幕府は元号を慶長から元和に改め、
天下泰平な世の中になったことを宣言します。
これ以降、幕府は寛永年間（1624–1644）にかけて、
様々な統制令を出し、
大名や朝廷・公家、寺院などへの支配を強めていきます。
一方、この時代には「寛永文化」と呼ばれる
「きれい」という美意識に基づいた宮廷文化が華開き、
その中心人物の一人が小堀遠州（こぼりえんしゅう）でした。
今回紹介する「御深井（おふけ）」・「白釉（はくゆう）」はこうした時代背景を基に、
消費地の需要に応じて生産された焼物です。

出典：colbase
（https//colbase.nich.go.jp/）

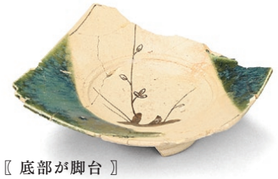
織部 Oribe Type

脱へうげものでシャレ感アップ

〖 切紙による絵付け 〗
黒織部茶碗（17世紀前期）

織部 の 意匠変化

織部は、慶長年間（1596–1615）の初め頃から焼成室が単室の大窯で生産され始め、慶長年間中頃から複数の焼成室をもつ連房式登窯で量産されるようになります。その最大の特徴は、大胆な歪みの造形と数種類の釉薬の組み合わせによって表現される鮮やかな色彩表現です。その後、慶長年間末頃から元和年間（1615–1624）に入ると、織部の意匠は豪快さが薄れ、端正な姿に変化していきます。茶碗では、大振りなものから小振りなものとなり、施文法は切紙が多用されるようになります。向付では、底部にワイングラスを彷彿させる脚台を貼付し、施釉法が掛け分けから流し掛けへと変化していきます。また、次代の御深井で主流となった彫文や刻線文を施すものも現れ、新たな時代の到来を予見させる動きが垣間見えます。



〖 底部が脚台 〗
青織部向付（17世紀前期）

〖 緑釉の流し掛け 〗
青織部向付（17世紀前期）：参考写真

御深井 Ofuke Type

We Love 綺麗さび♥

御深井釉大鉢（17世紀前期）

御深井焼 は どんな焼物か？

元和年間の末年頃から織部を主体に生産していた窯では、青灰色を呈する「御深井」と呼ばれる新たなスタイルの焼物を焼成するようになります。御深井の名称は、名古屋城にあった尾張藩の御用窯で焼かれた御深井焼の釉調に似ていることから名付けられています。中国の青磁をモデルとしており、器種には、碗類、皿類、鉢類、瓶類などがあり、鉢や向付が多く生産されています。形状は歪みがない左右対称となっており、施文は彫りや刻線、貼付、印花が主体で、蔓草（つるくさ）や連弁（れんべん）、波状などが施されています。生産された背景には、鎌倉時代以来続く唐物（青磁など）を賞玩（しょうがん）する武家の伝統的価値観があり、その伝統と格式を重んじた焼物として青磁を模倣した御深井が作られたと考えられます。

御深井釉茶碗（17世紀前期）

モデルとなった中国の青磁：参考写真
出典：colbase（https//colbase.nich.go.jp/）

御深井釉花入（17世紀前期）

御深井釉花入（17世紀前期）

御深井釉向付（17世紀前期）

白釉 Haku-yu Type (white Glaze)

推し釉は やわホワイト

白釉水指（17世紀前期）

白釉 は どんな焼物か？

元和年間の末年頃から寛永年間にかけて生産された青白色を呈する焼物です。白釉の名称は、様々な別の呼び名がありますが、本展覧会では、器の見た目が白く見えることを重視して白釉と呼ぶこととします。中国や肥前（九州）の染付をモデルとした焼物で、器種には碗類、皿類、鉢類、瓶類などがあり、碗や鉢、向付が多く生産されています。施文には彫りや刻線の他に呉須（ごす）絵があり、動植物や文字、幾何学状の文様などが施されています。生産された背景には、肥前の染付の誕生と、中国の内乱による中国磁器の生産量低下に伴う輸出の減少、そして国内での染付に対する高い需要があったと考えられます。

白釉茶碗（17世紀前期）

白釉向付（17世紀前期）

白釉鉢（17世紀前期）

白釉花入
（17世紀前期）